『林檎(りんご)』

作者　浅羽(あさば)　一(はじめ)

「私が死ぬ時に教えて上げる」
生まれ変わっても僕と結ばれてくれるかいと言う問いに、こちらを見下ろす彼女はゆるゆると微笑みながら答えてきた。
「だから、答が知りたかったら、絶対に私よりも長生きしてね」
酷なことを言ってくれるものだと、ベッドの縁にちょこんと座る白いワンピース姿を眺めながら思った。決して治らない病ではないらしい。けれど、現状では治せない病であるのならば、やがて導かれる結末は同じなのに。
「一日でも良いのよ。だって、私はあなたを失っても耐えられるほど強い女じゃないから」。ことある毎に彼女はそう言って、それから「だから、せめて私よりも長生きしてね」と繰り返した。ただの一度として「死なないで」とは言わなかった。
私はすでに納得していた。彼女もまた、おそらく納得していた。もしかしたら、それは私よりも早い段階であったかも知れないとさえ思う。
ただ、何よりも決定的に違ったのは、きっとその意味だった。
私は、自分がもう長く生きられないと知っていたし、その事実を受け入れていた。だからこそ、遠からず訪れる別れの時まで十分に幸せでありたいと願っていたし、来世に関する質問だって要するに二人の時間を楽しむ為の言葉遊びだった。私は無神論者というか、そもそも現実主義者なのだ。仮に、神を胸の内に抱くことで寿命が延びるシステムが存在するのなら、とっくに敬虔な信仰者になっていただろう。
彼女は、人は誰しもがいつかは必ず命尽きるものであると、その事実を受け入れていた。しかし、その時期をまだ生きている間に決めてしまうことを何よりも嫌った。ある意味で、彼女は私以上の現実主義者でありながら、同時に徹底的な理想主義者だった。
開け放たれた窓から、夏の香りを孕んだ風が吹き込んでくる。ベッドの上で横になっている姿勢だと、四角い枠は綺麗な純色で埋められる。体を起こせば途端に変わる視界だとしても、その瞬間だけは、世界はあたかも素晴らしく精美なものに見えた。だから私は、彼女の背後に美しい青が広がる光景を愛していた。
ふと、君は実は空を飛べるんじゃないのかい、そんな問いかけをしてみたくなった。実際には起こり得ない話だったけれど、この白く清らかな人であれば、そのままふわりと浮かんでまるで雲の一欠片さながらに空を漂ったとしても、それはそれで受け入れられそうに感じた。
結局、私は聞かなかった。彼女が何と答えるのか興味はあったものの、つい先ほどにあんな質問をしたばかりと言うこともあり、とりあえずまたの機会にしようと思った。時間の稀少さは承知しているが、あまりと言えばロマンチストに過ぎる態度を重ねることは、正直、それほど得意でないのだ。
「可愛い人」
だからいきなりそんなことを言われても、気の利いた台詞など返せない。せいぜいが、頬にそっと添えられた彼女の左手に、己の右手を重ねるくらいだ。ひんやりとした手は、頬と手の平の両方に心地よさを伝えてきた。彼女の右手には、ずっと果物ナイフが握られている。
「大丈夫」
と、どれくらいの間、そうしていたのだろう。いつしか肌と肌は溶け合い、体温の境目

がなくなっていた頃、不意に彼女がそう呟いて、私からそっと手を放した。名残惜しさに引っ張られるように視線でその行く先を追うと、彼女は枕元の棚に置かれていた紅い林檎を一つ、手に取った。

「あなたは絶対に、私よりも長く生きられるから」

柔らかくも真っ直ぐな声で言いながら、彼女は果物ナイフを使って器用に林檎の皮を剥いていく。

右手を動かさず、左手だけをかすかに回す。固定された刃と白い肌の隙間から、真紅の筋が途切れることなく床へと垂れていく。一心に林檎を見つめる彼女の横顔は、儚げで、美しく、絵画めいていて。それはまるで、遠からず訪れる未来の一瞬を垣間見たような気にさせてくれる光景だった。林檎はいよいよ完全に裸身を晒しつつあった。

ねぇ、と呼び掛けた。直後、細い皮がぷつりと切れて、彼女が「どうしたの」と首だけを動かして振り向いた。枕に頭を預けたままの私からは、床の上に溜まっているだろう紅色は見えず、また彼女の肌に存在するはずもない傷痕を確かめることも出来なかった。自分から呼んでおきながら、何を言いたかったのか分からなくて、私はややあってからこう告げた、愛しているよと。言った後で、多分、最初からそれを言いたかったんだろうと、そう思った。

「私もね、愛しているわ」

彼女はとても嬉しそうに目を細めると、まだ僅かに残っていたらしい林檎の皮を手際よく剥いて、切り分けたそれを皿に載せた。

そして彼女は右手に果物ナイフを握ったまま、左手の指でその一つをつまみ、こちらへと差し出してきた。瑞々しい林檎は、ほんのり黄色い白をしていて、紅い名残はまるでなかった。彼女に促されるまま一口かじると、口の中に優しい甘さが広がった。とても、とても美味しかった。

「知ってる？昔、朝に林檎を食べれば医者は要らないって言われていたのよ」

しゃくりしゃくりと林檎を味わう私を眺めながら、彼女は幸せそうだった。「それくらい、林檎には栄養が豊富なの」。

素直に、私は満たされていると感じていた。皮肉な現実かも知れないが、彼女がいてくれるからこそ、私はこうも穏やかに自らの終焉を受け入れられたのだ。

きっと、私はこの世の誰よりも罪深く、そして誰よりも幸せなのだろうと信じられた。

静かに息を吸うと、甘い残り香が鼻の奥へと広がった。

ねぇ、もう一つ貰えるかな。そう言うと、彼女は優しい声音で「はい、どうぞ」。

私は枕から頭を浮かせることもせず、細い指につままれて近付く林檎を、ただただ口を開けて待っていた。

〈了〉